

## すべては最後の夏のために――

秋の関東大会で4強入りした高崎高だが、新チームの練習はほぼ打撃のみ。理由は、「高校野球は最後の夏がメインだから」(境原監督)。伸びしろを残すため、走塁や小技は夏に完成させる。それまで失敗はOKという考えだ。その結果、選手はのびのびプレーするようになった。「素直で従順なので、「～でなければならない」だと窮屈になってしまう。許容範囲があるのがいいでしょう」(境原監督)。心のゆとりが好結果を生んだ。



程度の素人同然の監督になったんです。半分は「やったー。これで楽になるぞ」という気持ちでしたが、あとの半分は「オレたちどうなっちゃうんだろう」という不安でした。そこで「自分たちでやらなきゃまずいぞ」という雰囲気になって、自ら考え、動き始めた。それが秋に関東大会の決勝まで勝ち上がった要因でした。

ひるがえって自分はどうかと考えたときに、指示を待つ雰囲気を作ってしまった。じゃあ、当時の監督のように素人になろうと思っても、生徒はそうは思わない。そこで、余分なことを言わないで、我慢して我慢して見守る、熟成するのを待つことを意識するようになりました。そうしていく中で、いいきっかけになったのが2年前。OBがいる

関係で筑波大の練習を見学させていただいたのですが、そのときにミーティングに混ぜてもらえたんです。上意下達で終わるのではなく、その目を振り返って「どうだ？」と投げかけたときに、どんどん手が挙がる。こうだったからこうしようというところから意見が出る。どういうやり取りをしながらミーティングが進むのかを直に見られた。そのあたりから、生徒が考えてやる、自分たちでやるというのがどういうことか分かったんですね。

そうはいっても、選手もこちらもやはり葛藤があったのか、その代は秋春夏の3季一度も勝てずに終わりました。今のチームと

比べてもそんな力があったんですが……。でも、それがだんだん定着して今がある。あの一年があったから今があると思います。

今は練習メニューも生徒たちに決めさせています。昼休みにその日のメニューを報告に来て、こちらから注文があればそれを入れますが、基本的には生徒任せです。やらせてみて感じるのとは違うということ。自分たちで決める分、きついメニューで

も我慢できます。

もちろん、私自身も我慢が必要です。細かい技術などはつい口を挟みたくなるんですが、我慢する。ひとつ言い始めると、いろんなところが気になってきてしまいますからね。すぐに言って直したくなりますが、時間をかけることも大事なのかなと思います。自分で発見するように仕向けたほうが、本人も忘れないし、大会中でも自分で修正できる。「はい」と返事しても、言われてやったことは意外と身につかないのかなと感じています。

現在部長として一緒に指導されている関根(秀仁)先生も控え投手として甲子園を経験しています。お互い母校でやれる幸せを感じつつ、よく話していたのが「時代が変わっているいろいろな変化してきたけど、当時の良さはある」ということでした。じゃあ、「高崎の良さとは何か?」といったら、男子校であり、110年続いた歴史であり、バンカラさだよなど。それをもう一度戻したいというのが2人の共通意見。そこで、応援の仕方から変えました。当時は応援団員がゲタを履いて、応援団主導で応援していた。ところが、最近ではバンドや野球部員が応援をする中に応援団がいる形になっていたんですね。今の3年生の保護



2012年春のセンバツ出場も見えてきた高崎ナイン

者会長がたまたま甲子園に出場したときの応援団長という縁もあり、「なんだこの応援は!? 応援団主導の甲子園スタイルに戻そう」と。高崎には、押せ押せのときや点が入ったときに流れる『天行く翼』という応援歌があるんですが、その曲や「ワッショイ、3・3・7拍子」などで応援する。今風のチャラチャラした雰囲気は応援はやめました。

また、服装も当時は学帽を必ずかぶらなければいけなかった。甲子園にも学帽をかぶって行ったほどです。学帽自体も二本ラインの高高スタイルに決められていて、形をいじるとすごく怒られた思い出があります。現在は学帽自体が人手困難ですが、記録員だけでもということで、公式戦のベンチでは学帽をかぶるようにしています。これはOBに好評で、記録員の子はよく「オレにもかぶらせろ」といってOBの方に帽子を取られるようです(笑)。こういった「高崎の良さを前面に出そう」ということをやることで、高崎らしさが出てきた。それが力として出ている要因なのかなと思います。

高崎には、学校の特長として新しいものを生み出していこうという気質があります。これまでの結果や記録、110年続いてきたことが伝統というわけではない。ですから、今のやり方に満足することなく、今までの高崎の気質を十分に生かしながら、さらに良いものを見つけていきたい。今回はこの方法で関東大会4強という結果を残せましたが、それが毎回通用するとは思いません。夏

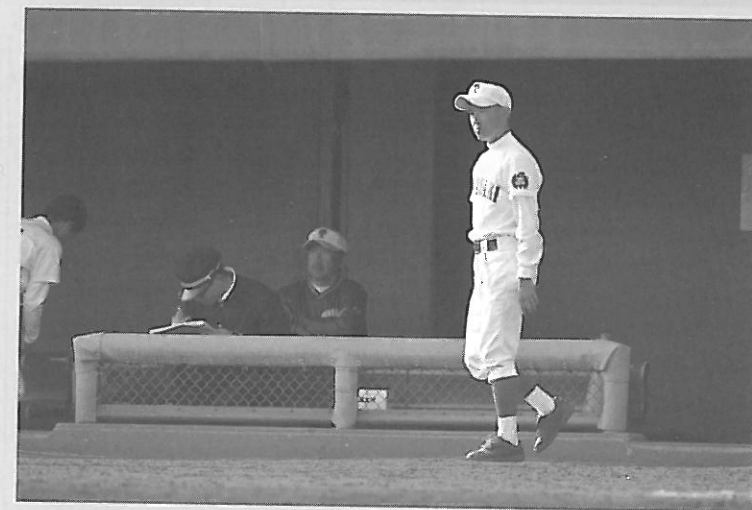
へ向け、もっといい方法を考えていきたい。それが新しい伝統になるのではないかと思います。

(取材・構成/田尻賢吾)

### TEAM DATA

#### 群馬・高崎高

部員数: 37名(2年20、1年17) / 指導陣: 境原尚樹監督、関根秀仁部長、島田学副部長  
練習環境: 学校グラウンド(他部と共用)、ブルペンあり / 練習時間: 平日16時~19時、土日9時~17時。



ベンチから指示を送る境原監督。記録員は学帽を着用